

二〇二四年度入学試験問題

国

語

(五〇分)

第一回 二月一日実施

〔注意〕 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
問題用紙も提出しなさい。

吉祥女子中学校

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。

ラジオを聴き、人の書いたものを読むことは、他者の意見や考えを幅広く吸収することでもある。個人の限られた行動範囲内では得られない経験を積むことができる。うえ、想像力も育まれる。これらは実際に人と接して言葉を交わす経験を補完するものではあるが、^①そういう体験にとつて代わるものではない。ラジオや書物などを媒介としたコミュニケーションには、表情や動作をはじめとする言語外のメッセージの往来や、臨機応変な即時の言葉のやりとりがない。それらがともに現れるのは、インターアクション（相互作用）をとまなう生身の人間との対面コミュニケーションにおいてのみである。

インターアクションをとまなう対面コミュニケーションといつてもいろいろある。相手が友人や同僚であれば、共通理解事項も多いため話題に事欠かず、言葉づかいを気にする必要もない。同業者の場合もほぼ同様だ。

それに対して、職業や年齢の異なる人とは、つねに気楽にコミュニケーションがとれるとは限らない。話題選び、言葉づかいはもちろんのこと、言語と直接関係のない、表情や視線、態度、身だしなみなどへの配慮も要求される。話題選びにしても、^②暗黙の了解事項の少ない、もしくはほとんどない相手とどんな話をすればよいのか、ジョークを言ってもよい相手なのかそうではないのか、また、どんなジョークなら会話の潤滑油になりうるのか等々、考えるべきことはつきない。

A、一方的な講義や講演と違って、すべてをあらかじめ準備しておけるわけではない。相手の出方次第でとっさの判断をしなければならないことのほうがずっと多い。

かつては、日常生活のなかで当たり前のように多種多様な相手と言葉を交わしていた。周囲の人々が話しているのを聞き、自分自身もまたバラエティーに富んだ話し相手を持つことによつて、とりわけ子どもたちは日本語の語彙を増やし、言い回しを覚え、言葉の駆け引きを学んだ。知らず知らずのうちに、コミュニケーションの訓練を積んでいたと言える。住形態も生活様式も変化した現代人には、横丁のご隠居さんや町の八百屋さんや会話を楽しむ余裕は、もはやほとんどない。横丁も隠居も存在そのものが失われつつあり、買い物はひとことも発することなくスーパーマーケットですませる昨今、会話らしい会話もせずに日々を送る者もいるほどだ。

三〇年ほど前に比べて明らかに、日本人、厳密には東京で見かける日本人は、見ず知らずの人と話をしなくなり、笑顔を見せることがなくなった。その三〇年前ですらすでに、高度経済成長期以降の東京人が他人に無関心になったことを憂える声は少なくなかった。**B**、当時の東京では、長い間家族ぐるみの付き合いをしてきた下町の人々は言うまでもなく、郊外の新興住宅地の住民であつても、たえず言葉を交わし合い、互いのことをよく知っていた。声をかける相手は知り合いばかりではなかった。停留所でバスを待つ間に見ず知らずの者同士がおしゃべりをしたり、電車のなかに赤ん坊連れの若い母親がいれば、まわりの者が寄つてたかつて赤ん坊をあやしたり、だっこさせてもらつたりするのは、ごくふつうの光景だつた。

③ 一九七〇年代半ばと八〇年代前半にフランスのパリにしばらく滞在して帰国したとき、私は東京の人々の穏やかな表情と人のよさそうな笑顔にほっとしたことを覚えてる。パリの町ですれ違う人々は一様に険しい顔つきをしていて、見知らぬ者同士が諍いをし、口だけでなく手や足も出る小競り合いを見かけることも珍しくなかつた。役所や郵便局や小売店に行けば、係員や従業員同士がおしゃべりに忙しく、片手間に客の応対をしているような印象すら受けた。二、三〇年という歳月を経て、パリは自信と落ち着きを取り戻したのか、人々の表情と言動に余裕が戻ってきたように感じられる。一方、現在の東京は、人々の態度が当時のパリを思わせる。

ただし大きく異なる点がある。それはいまの東京の人が、当時のパリとも現在のパリとも、またかつての東京とも違って、非常に無口だということだ。事件や事故が起こつて電車が大幅に遅れた場合でも、乗り合わせた赤の他人同士あまり口をきかない。情報交換をしたり、愚痴をこぼし合つたり、観念して冗談を言い合つたりしていたとしたら、それは一部の中高年者だ。アクシデントに見舞われた電車内で、連れのいない乗客は、いらいらした面持ちで黙りこくっているか、さもなければ携帯電話の電波の先にいる知り合いに自己の置かれた状況を説明するだけである。

フランスではしばしば、日本人の顔を評して「ヴィザージュ・エルメティック」と言う。内心の読み取れない無表情な顔、という意味だ。表情が豊かであれば内心が読み取れるかという点必ずしもそうではないが、言語メッセージの内容と顔の表情は密接な関わり

りを持つと考えている人々にとって、無表情な日本人は不可解な存在だ。それに加えて、パリを訪れる日本人団体客は、挨拶をしない、お礼を言わない、笑顔を見せない、と評判で、「日本人は礼節を重んじる人々だと聞いていたが……」と、驚きと不審の目を向けられている。

東京人が、他人と話をせず、笑顔を見せず、視線を向けようともしなくなったいま、**C** まわりとのコミュニケーションが途絶えたいまになって、その重要性が叫ばれ始めている。コミュニケーションのトレーニングを積んでこなかった現代人は、話し方教室での自己啓発セミナーだのに通う。かつてはだれもがいつのまにか、したがってさほど苦痛もなく身につけたコミュニケーションのスキルを、いまやお金を出して、苦勞して習う時代なのだ。

⑨ 「電話のかけ方一つ知らない」と若者を非難する大人がいる。携帯電話が普及したことで、相手の家に電話をかける時間を気にしたり、取り次いでくれる家族に対する言葉づかいに気を配ったりする必要がなくなったのだ。必要も機会もないとしたら、人はものを覚ええない。

(野口恵子『かなり気がかりな日本語』)

注 *啓発……知識や理解を深めること。また、そのための導き。

*スキル……技能、腕前。

問一 ～～～～線ア「事欠かず」・～～～～線イ「潤滑油」とはどのような意味ですか。もつとも適当なものを次の1～4からそれぞれ1つ選び、番号で答えなさい。

ア「事欠かず」

1 不足せず

2 不安にならず

3 取り残されず

4 注意せず

イ「潤滑油」

1 始めるきっかけになるもの

2 終えるきっかけになるもの

3 うまく進めるためのもの

4 大いに盛り上げるためのもの

問二

A

C

にあてはまる言葉としてもつとも適当なものを次の1～6からそれぞれ1つ選び、番号で答えなさい。同じ番号をくり返し使ってははいけません。

1 つまり

2 たとえば

3 さもなければ

4 しかも

5 しかし

6 なぜなら

問三

線①「そういう体験」とはどのような体験ですか。もつとも適当なものを次の1～4から1つ選び、番号で答えなさい。

1 他者の意見や考えを幅広く吸収する体験。

2 個人の限られた行動範囲内では得られない体験。

3 想像力が育まれる体験。

4 実際に人と接して言葉を交わす体験。

問四 —— 線②「あんもく「暗黙の了解」りようかい」が成り立っている具体例としてあてはまらないものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 彼はサッカーの試合で完敗して以来ひどく自信を失ってしまっているので、友人たちはできるだけサッカーについては触れなようにしている。

2 友人とは長い付き合いで、何も言わなくても表情だけでどんな気分であるのか分かるので、明るい表情の時には何か良いことがあったか聞くことにしている。

3 先日、私は母に恋愛れんあいについて相談した。それ以来、母との会話の中では「例の人」と言うだけでそれが私の恋人こいびとのことを指すのだと通じるようになっていく。

4 私はあるアニメの大ファンで、そのグッズをいつも身につけている。そのアニメが放送された翌日は、友人たちが私にその番組の感想を話してくれる。

問五 —— 線③「一九七〇年代半ばと八〇年代前半」とありますが、次の(1)と(2)の具体例について、文中で述べられている

「一九七〇年代半ばと八〇年代前半」の「パリ」とくちようの特徴にあてはまるものは1を、「東京」の特徴にあてはまるものは2を、どちらにもあてはまらないものは3を書きなさい。

- (1) 精肉店に買い物に行くと、店員同士が話に夢中になっていた。精算を終えるまで客である自分の方はちらりとしか見なかった。
- (2) 食料品店に買い物に行くと、小学校はいつから夏休みなのかと聞かれた。昨日からだと答えると、家のお手伝いをたくさんするようにと言われたり、私が持ちやすいように買ったものを二つの袋ふくろに分けて入れてくれたりした。

問六 —— 線④「現在の東京は、人々の態度が当時のパリを思わせる」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 現在の東京の人々は、精神的に余裕がなく見ず知らずの人に冷淡であるという点で、当時のパリの人々と似ているということ。
- 2 穏やかな表情と人のよさそうな笑顔で他人と接する点で、現在の東京の人々と当時のパリの人々との共通点だということ。
- 3 現在の東京の人々は、一様に険しい顔をして争いばかり起こしていた当時のパリの人々の影響を多大に受けているということ。
- 4 自信と落ち着きを取り戻した当時のパリの人々の態度が、現在の東京の人々に大きな影響を与えているということ。

問七 —— 線⑤「赤の他人」との対面コミュニケーションで必要なこととして筆者はどのようなことを挙げていますか。文中から五十字でぬき出し、初めの五字を書きなさい。

問八 —— 線⑥「情報交換をしたり、愚痴をこぼし合ったり、観念して冗談を言い合ったりしていたとしたら、それは一部の中高年者だ」とありますが、それはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 中高年者は長く生きているぶんコミュニケーションの訓練を多く積んできているから。
- 2 中高年者は見ず知らずの者同士がすすんで会話をすべきであるとされた時代に育ったから。
- 3 中高年者は携帯電話を用いて知り合いと連絡をとるというコミュニケーションになじみがないから。
- 4 中高年者は様々な相手と会話することが当たり前だった頃の日本を経験しているから。

問九 —— 線⑦「驚きと不審の目を向けられている」とありますが、それはなぜですか。五十字以上六十字以内で説明しなさい。

問十 —— 線⑧ 「かつてはだれもがいつのまにか、したがってさほど苦痛もなく身につけたコミュニケーションのスキル」とありますが、かつての日本人が日常生活の中でどのようにコミュニケーションのスキルを身につけていたかが具体的に説明されている一文をぬき出し、初めの五字を書きなさい。

問十一 —— 線⑨ 「電話のかけ方一つ知らない」とはどういうことですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 見ず知らずの人に電話で直接話をすることをこわがり、メールなどの文面で用事をすませたがるということ。
- 2 電話がかかってくるのを待つばかりで、目上の人には自分からかけるのが礼儀だと分かっているということ。
- 3 声に出して言葉で電話の相手に用件を伝えたり相手の返事を聞いたたりするのを苦手としているということ。
- 4 電話で用件を伝える際に、相手に応じて挨拶や受け答えなどに気をつけながら話すことができないということ。

問十二 筆者は本文中で、現在の日本のどのような問題点を指摘していますか。また、その問題点に対する筆者の解決策はどのようなものだと考えられますか。本文全体をふまえて八十字以上九十字以内で説明しなさい。

二

転校が決まった梢は、弟の桂太とそのことについて話をしています。この場面から始まる次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。字数指定のあるものは、句読点やかっこなどもすべて一字に数えます。なお、問題の都合上、もとの文章から一部省略した部分があります。

「……桂太はさ、転校で友達と別れるのが寂しくないの？」

口にしてしまってから後悔した。そんなこと聞いちゃ駄目だ。桂太だってつらいのを隠してるだけなのかもしれないに……。けれど桂太はちよつと驚いたような顔をしただけで、平然とあたしの質問にこたえた。

「寂しいけど、おれにはこれがあるから」

桂太はズボンのポケットをごそごそやって、キラキラしたメダルを取り出した。たしか桂太が好きなアニメに出てくるメダルだ。

①「このあいだみんなでおそろいの買ったんだ。転校してもずっと友達だって、約束の証なんだよ」

あたしはきよんととしてしまった。桂太は友情の証をあたしに見せつけて、自慢げな顔をしている。その表情を見つめているうちに、胸の奥で暗い感情がわきあがってきた。

そんな約束、なんの意味もないよ。あんたの友達も、どうせそのうちあんたのことを忘れてしまうよ。

無性にそう言っただけでよかった。思いきり意地悪に告げて、桂太を泣かせてやりたくなった。だけどあたしはその衝動をこらえて、「いい友達じゃん」とにっこりした。

桂太が笑顔でうなずいて、約束のメダルをポケットにしまった。そのうれしそうな顔を見て、あたしは心から思った。

あたしも桂太みたいに、無邪気な約束を信じられたらよかったのに、と。

(中略)

「実は、高梨と雅人のふたりから、続けざまに同じ相談をされたんだ。転校する飯島のために、なにかしてやれることを思いつかな

いか、って」

「えっ、桃はともかく、足立まで？」

ああ、と道橋はこちらを振りむかずにこたえた。

「おれにそんな相談をされても困るんだけどな。ただ、たまたま飯島にびつたりの本を知ってたから、それを紹介しようと思ったんだ」

道橋がそう話したところで、図書室の前に着いた。

本、とあたしは身構えてしまった。②あたしが読むのは基本的に料理の本だけだ。あとは小学生のころに、桃にすすめられて童話をちよつと読んだくらい。

道橋はさっさと図書室に入ると、小説の棚からその本を選びだした。なるべく薄くて絵がいっぱいあるのがいいな、と思っていたら、まさかの上下巻だった。

「無理無理、上下巻とか絶対転校までに読めないって。だいたいそれ、絵とか全然ない普通の小説なんでしょ？」

「挿絵はないけど文章は比較的読みやすいほうだから、普段読書をしていなくても、まあ読めるだろう」

読めるか。あたしの読書力のなさをなめるな。思わずそう突っこんでしまったけど、道橋はだいじょうぶだと無責任にあたしを信頼するだけだった。

道橋がしつこくすすめてくるので、最終的に上巻だけ借りることになった。

「下巻は借りなくていいのか？」

「だから、上巻だけだって三学期中に読めるか自信ないんだってば。おもしろかったら、続きは転校先でまた借りて読むからさ」

「いや、それじゃ意味がないんだ。③せめて上巻だけでも頑張つて最後まで読んでくれ」

無茶言わないでよ、と返しながら、と返しながら、カウンターに本を持っていくと、図書当番の先輩がバーコードをピッとやって、貸出の手続き

をしてくれた。

借りた本はその晩、夕飯の片づけが終わったあとでぼちぼち読みはじめた。あらすじによると、中学卒業後にばらばらになった仲間たちが、十年後に故郷の街で再会する、というような話らしかった。

物語のはじまりは、卒業式を終えた主人公たちが、再会を約束する場面だった。道橋がこれをすすめてきた理由はなんとなくわかったけど、読んでいたらつらくなくなってしまいそうで、あたしは最初の章も読み終わらないうちに、本を閉じてしまった。

だけど、こう早々と投げだしてしまっただけで、せっかくなすめてくれた道橋に悪い。そんな気がして、とりあえずばらばらとページをめくっていたあたしは、本の最後のページにくっついたポケットから、小さな紙が顔を出しているのを見つけた。ポケットは昔、貸出用のカードかなにかを入れていたものようだった。

なんだろう、と気になって、その紙を取りだしてみると、それはかわいらしいデザインのメッセージカードだった。そしてそこに記されていたメッセージを読んで、あたしは大きく目を見開いた。

『十年後にまたこの場所です！』

『離ればなれになっても、わたしたちはずっと友達であることを誓います！』

カードにはそう書いてあった。カラフルな丸文字で、隅のほうに四人の女子の名前と、『二年三組図書室シスターズ』という署名も書き添えられている。

二年三組ということは、卒業で離ればなれになったわけじゃない。だとするとここに記してあるのは、もしかしてあたしのように転校していく友達とのあいだで交わした約束なんじゃないだろうか。

道橋があたしにこの本を押しつけたのは、これを見せたかったからに違いない。だけど、とあたしはカードから視線をそらした。

④ だけど、このカードだって、結局は桂太の友情の証といっしょだ。こんなものを残したところで、約束が果たされなくては意味がない。だいたい、一年だって連絡がなくなってしまうんだから。物語の内容にあわせたんだらうけど、十年越しの約束なんて無理に

決まってる。

あたしはため息をついて、もとのポケットにカードをしまおうとした。けれどその途中で、ふとその手を止める。

道橋のやつが、しつこく下巻も借りるようにすすめてきたのが気になったのだ。あたしにこれを見せたかっただけなら、べつに下巻を借りさせる必要はなかったのに……。

首を傾げたところで、まさか、とあたしは息をのんだ。そして手にしたカードをじっと見つめる。

はつきりとはわからないけど、カードはそれなりに古いものに見えた。続けていきおいよくページをめくってたしかめると、本が出版された年は十年以上前になっていた。

あたしの鼓動はいつのまにか速くなっていた。まさか、そういうことなのか。道橋がほんとうにあたしに見せたかったのはそれなのか。

あたしは部屋の時計を見た。だけど時間を確認するまでもなく、学校の図書室はもうとつくに校舎ごと閉まったあとだ。道橋のすすめに素直に従って、下巻もいっしょに借りてこなかったことを、あたしは深く後悔した。

思いついた可能性が気にかかって、なかなか寝つくことができず、あたしは寝不足の状態^{むか}で朝を迎えた。そしていつもより早めに家事をすませて登校すると、まっすぐ図書室に向かつて、うろおぼえの本棚から昨日の本の下巻を見つけだした。

本を手にとって、最終ページを開く。するとあたしが予想していたとおり、ポケットには上巻と同じように、小さなカードが収められていた。カードはゆうべ見たものより、だいぶ新しそうだった。

祈るような気持ちで、ポケットからカードを取りだして、あたしはそこに書かれたメッセージをたしかめた。

『わたしたちの友情は永久に不滅！』

カラフルな蛍光ペンで記されたメッセージが、誇らしく輝いているように見えた。カードの隅には上巻のものより大人びた筆跡

で、署名と数年前の日付が書いてある。署名の数は四つ。約束を交わした仲間は、誰ひとりとして欠けていなかった。

それを見た途端、あたしは目頭が熱くなった。桂太が友達と交わした約束を、あたしは鼻で笑った。そんな約束、なんの意味もない。ただこうして、十年越しに果たされた約束を目のあたりにして、あたしの心は揺れていた。

あたしも美貴たちと、こんな約束を交わすことができたなら……。

心の底から強い願いがあふれてくるのを感じながら、あたしはメッセージカードを見つめていた。ホームルームが始まることも忘れて、いつまでもずっと見つめていた。

三学期もいよいよ終わりが近づいてきて、給食に卒業メニューが出る日がやってきた。

転校までに残された時間は、もうあとわずか。けれどあたしはまだ美貴たちと、あのメッセージカードのような約束を交わすことができないでいた。

約束をしたって、それが必ず果たされるという確証はない。交わした約束が忘れられてしまうのは、自然と絆が消えてしまうより、きつともっと悲しい。そんなふうに考えたなら怖気づいてしまって、美貴たちに約束の話を持ちかける勇気が出せなかったのだ。

「ふうん、卒業式の日じゃないのに、卒業メニューが出るのね」

美貴が給食のトレイに載った豪華なメニューをながめて言った。卒業メニューは毎年恒例だけど、去年まで小中一貫の私立学校に通っていた美貴は、そういうメニューがあることを知らなかったらしい。

「卒業式の日だと、卒業生は給食出ないからさ。メニューはいつも違うんだけど、このデザートはクレープだけは、なんでか毎年変わらないんだよね。まあ、おいしいから全然かまわないんだけど」

あたしは『卒業おめでとう』とビニールの包装に印刷されたクレープを美貴に見せて説明した。中学になっても給食センターは小学校のときと変わらないから、これを食べるのも、もう

⑥

度目になる。

今年の卒業メニューはそのクレープに、メンチカツとミネストローネとフルーツポンチ。どれも人気メニューで、あたしの好物ばかりだ。

いつもだったら全部おかわりするようなすばらしいメニューなのに、あたしはなかなか箸が進まなかった。卒業メニューが、お別れメニューのように思えてしまったのだ。

お別れなんてしたくない。二年後の卒業のときも、この学校で美貴たちといっしょに卒業メニューを食べていたい。そう思ったら、大好きなメニューも食べたくなってしまっていた。給食を食べたくないなんて、小学校入学以来はじめてのことだった。

それでものろろと食べ進めて、最後にデザート⑦のクレープが残った。あたしがそれに手をつけるのをためらっていると、こっちを見ていた美貴と目が合った。

美貴はなにかを察したような顔をしていた。そんな美貴に、なんでもないよ、と伝えるようにほほえんでみせると、あたしはクレープに手を伸ばそうとした。

そのとき突然、美貴があたしに尋ねてきた。

「ねえ、そのクレープ、わたしにしてくれない？」

あたしは ⑧ を丸くした。美貴が給食をねだることなんて、これまでなかったから。班のみんなも、えっ、というふうに美貴のことは見ていた。

べつに惜しくはなかったけど、あたしはわざと意地悪に聞きかえした。

「うーん、条件にもよるかな。これの代わりに、美貴はなにをくれるわけ？」

「なにもあげない」

美貴は平然とこたえた。その返事を聞いてあたしはきよとんとしてしまふ。

「いやいや、それはないよ。こんなレアなメニューをただでもらおうなんて、いくらなんでも虫がよすぎ……」

「ごめんなさい、言いなおすわ。いまはなにもあげない」

美貴があたしの言葉を遮った。あたしが首を傾げると、美貴はあたしの顔をまっすぐに見つめて続けた。

「でもその代わりに二年後、三年生のときの卒業メニューのデザートを、梢のところに持っていくわ。傷まないように冷凍して、週末に電車に乗って。絶対に、約束する」

美貴の眼差しは真剣だった。美貴の言葉の意味に気がついて、あたしの胸は震えた。

あたしがひそかに望んでいた約束を、美貴はいま、交わしてくれようとしているのだ。あたしが転校したあとも、ずっと忘れずにいる。ずっと友達でいる。そういう約束を。

不安と期待が混ざりあった感情を隠して、あたしは軽い口調でたしかめた。

「そんな約束、ほんとにしちゃっていいの？ あたしの食い意地が張ってるの、美貴も知ってるでしょ。もし約束を破ったら、一生美貴のことを許さないかもよ」

「だから約束になるんでしょ。わたしだって生涯に恨まれたくはないもの」

美貴はすました顔でこたえた。

⑨
あたしはもうへらへらしたふりを続けられなくなっていた。あたしは美貴の顔を見つめ、それからトレイに載ったクレープに視線を落とした。図書室で見つけたカードのメッセージが、頭の中に浮かんでいた。

約束の結果が、どうなるかはわからない。それでもあたしは、美貴のことを信じたい。臆病な心を奮い立たせ、あたしは美貴にクレープをわたそうとした。

けれどその途中で、あたしはもう少しだけ欲張りたくなってしまった。

「……あのさ、ただ持ってきて、すぐ帰っちゃうとか、そういうのはなしだからね。近場のおすすめスポットとか、おいしい店とか調べとくからさ、帰りの電車の時間まで、ちゃんとつきあってくれないきゃ嫌だからね。いまみたいに話したり、遊んでくれないきゃ嫌

だからね」

「ええ、もとからそのつもり。もつとも、それまでに何度も遊びにいつてるだろうから、近所のおいしい店は行きつくしてるかもしれないけど。そのときは、梢の手料理を振舞^{ふるま}ってくれればいいわ」

ほっとした拍子^{ひょうし}に涙^{なみだ}がこぼれそうになった。転校のことを知らないまわりのみんながざわざわはじめていたけど、あたしは気にしなかった。

美貴にクレープを手渡^{てわた}すと、となりの班の桃が美貴のところに来てきた。

「美貴ちゃん、わたしにも半分ちょうだい」

もちろん、と美貴がうなずいた。それから美貴が朋華と沢ちゃんを呼ぶと、ふたりもすぐに飛んできた。あたしたちの話が聞こえていたのか、普段は給食中の出歩きを注意する辻井先生も、いまは黙^{だま}って見逃^{みのが}してくれていた。

美貴が約束の説明をして、四つに分けたクレープをみんなに配った。それから四人はあたしのほうに向きなおり、同時にあたしのクレープを口にした。誓^{ちか}いの儀式^{ぎしき}のように、厳^{おご}かに。

(如月かずさ『給食アンサンブル』)

問一 —— 線①「あたしはきよんととしてしまった」とありますが、このときの「あたし」の気持ちとしてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 生まれた時から一緒に過ごしているのに、転校することがつらいという本心を姉の自分にさえ見せようとしないで強がりと言う桂太の意図を理解できないでいる。

2 生まれた時から一緒に過ごしているのに、桂太が転校して友達と別れることを寂しいと感じないとは予想していなかったのに、弟の意外な性格を不快に感じている。

3 つらいことを聞いてしまったと悔やんだのに、桂太は離れても友情がとだえることはないと感じ、転校をたいしてつらいとは思っていないと知って意外に思っている。

4 つらいことを聞いてしまったと悔やんだのに、桂太は友達と離れることよりも新しいメダルを手に入れたことを喜んでいるように見えてとまどっている。

問二 —— 線②「あたしは身構えてしまった」とありますが、ここには「あたし」のどのような気持ちが表れていますか。三十字以上四十字以内で説明しなさい。

問三 —— 線③「それじゃ意味がないんだ」とありますが、なぜ道橋はこのように言ったと考えられますか。本文全体をふまえて四十字以上五十字以内で説明しなさい。

問四 ——— 線④ 「結局は桂太の友情の証といっしょだ」とありますが、どのような点で「いっしょ」のですか。もっとも適当なもの
のを次の1〜4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 目に見えるものを持つことで、離れていてもずっと相手を忘れないでいられるという点。
- 2 かつてはとも仲がよかったことを、その後もずっと目に見える形で残すことができるという点。
- 3 離れたらもう友達ではなくなってしまうという現実を、ずっと忘れさせないものであるという点。
- 4 ずっと友達でいるという約束が守られず、期待した自分に悲しみを与えることになるといふ点。

問五 ——— 線⑤ 「あたしの心は揺れていた」とありますが、どのような思いの間で揺れていたのですか。次の
あてはまるように四十字以上五十字以内で説明しなさい。

□□□□□□□□□□
の間で揺れていた。

問六 ——— 線⑥ にあてはまる数字を漢字で答えなさい。

問七 ——— 線⑦ 「あたしがそれに手をつけるのをためらっている」理由が書かれている一文をぬき出し、初めの七字を書きなさい。

問八 ——— 線⑧ にあてはまる言葉を漢字一字で答えなさい。

問九 —— 線⑨ 「あたしはもうへらへらしたふりを続けられなくなっていた」とありますが、このときの「あたし」の気持ちとして

もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 落ち着かない気持ちを隠そうとふざけたふりをしていたが、自分が望んでいた約束が美貴と本当に交わされようとしている状況になり、思わず真剣になっている。

2 自分に会いに来るといふ美貴の突然の言葉に驚くあまり、落ち着かない気持ちを隠すことができなくなってどうしたらよいか分からなくなっている。

3 美貴の言葉が本心から発せられたものかどうかを判断することができず、自分がどういう態度をとるべきかが分からなくなってしまうという状態になっている。

4 美貴が真剣な様子で大切な約束を交わそうとしているのを察知して、自分の普段のふざけた態度で場の雰囲気（ふんいき）を乱してはいけなさと考えを改めている。

問十 —— 線⑩ 「涙（なみだ）がこぼれそうになった」のはなぜですか。もつとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

1 期待していた以上の言葉を美貴が返してくれたことで、ずっと胸にかかえていた不安から解放されたから。

2 不安で張り詰めた（は）気持ちを察した美貴が、軽妙（けいみょう）で気の利いた返事（き）をしてくれたので、心が軽くなったから。

3 美貴の友を案（あ）じる思いやりに満ちた言葉（ことば）に触（ふ）れて、美貴が友達（ともだち）でいてくれたことがうれしくなったから。

4 無理（無理）なお願い（ねがひ）をして嫌（きら）われたと思（おも）っていたが、美貴も同様（どうぐ）に無理（無理）なお願い（ねがひ）をしてきたので気持ち（こころ）が楽（やす）になったから。

問十一 ——線⑩「四人はあたしのほうに向きなおり、同時にあたしのクレープを口にした。誓いの儀式ぎしきのように、厳おごかに」について答えなさい。

(1) 「四人」とはだれですか。次の1～9から四つ選び、番号で答えなさい。

- | | | | | |
|------|------|------|--------|------|
| 1 桂太 | 2 美貴 | 3 飯島 | 4 道橋 | 5 高梨 |
| 6 雅人 | 7 梢 | 8 朋華 | 9 沢ちゃん | |

(2) 四人がそのような行動をとった理由としてもっとも適当なものを次の1～4から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 転校する「あたし」と卒業メニューを一緒に食べる最後の機会なので、その瞬間しゆんかんをかみしめるため。
- 2 全員が約束の重みを理解し守りぬこうと心に固く決めていることを「あたし」に伝えるため。
- 3 四人との約束が守られることを信じていない「あたし」に対して、自分たちの真剣さを伝えるため。
- 4 自分たちの覚悟かくごを再確認することを通して、「あたし」と別れるさびしさを少しでもやわらげるため。



次の1～6の——線のカタカナを漢字で書きなさい。

- 1 キンベンな学生が多い。
- 2 コウセキを挙げた人に授与じゅよされる賞。
- 3 マフラーをアむ。
- 4 物価高は生活のあらゆるリヨウイキにおよんでいる。
- 5 ボウハンのために見回りをする。
- 6 妹のチームはアブあぶなげなく勝利した。

問題は以上です

